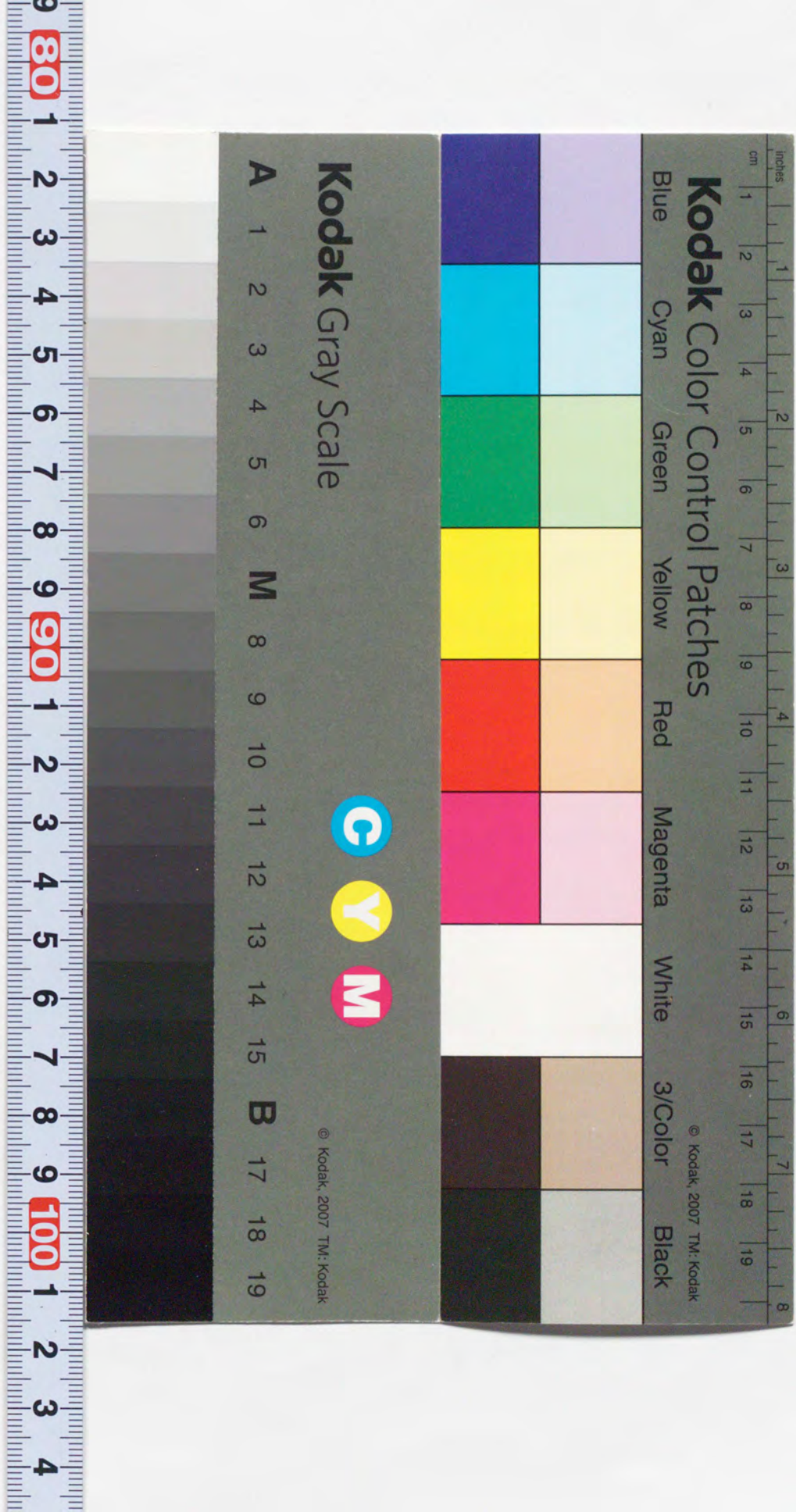




八犬傳第七輯卷之五附記考并小狗の畧説

闘牛ハ原西美の戯ウツクシ西陽雜俎境異篇云龜茲國元日闘牛

馬駝為戲七日觀勝負ミテ一羊馬減耗ミツク繁息也ハナハシ是

より先サキ三國の時魏の曹植が牛闘の詩を行彼山頭ヤマノヘ歎起相搏突

とのひふ二牛の自然シテ闘るト夏ハ太平廣記又野客叢書ニめるハえ

るハ又淵鑑類函卷四百二仇池筆記載牛闘尾入ハ而股間

といハ。闘ハ牛闘ハ尾闘ハ。又昭代叢書卷二竹枝詞の附録土謠部苗人と

詠ハ詞ハ身被ハ木葉ハ挿ハ雞頭ハ銅鼓ハ家家ハ賽闘ハ牛ハといハ句あり注

歳時ハ親戚ハ搗銅鼓ハ闘牛ハ於野ハ判其負者ハ祭而食之ハといハ

唯牛のミハあハ西域ハ闘羊ハ闘素駝ハあハと右ハの如ハいハ瀛海

勝覽云勿魯謨斯國羊有四種大尾綿羊重七八十斤其

勝覽云勿魯謨斯國羊有四種大尾綿羊重七八十斤其

尾闊一尺餘拖地重二十斤狗尾羊如山羊尾長二尺餘

開羊高二尺七八寸前截毛長拖地後半剪淨頗似縣羊

角彎向前上帶小鐵牌好闘好事者養之賭博為戲類

るを盤出さば猶いふもあつて人を大く似するをれば此は許すや又按る所

周末戦國の時角觝の戲を為し憶ふ秦晋北燕を胡國は近なり諸侯彼

闘牛は擬してこの戲を作するらん正字通角字注は角觝戲名觝通作

抵六國時所造而々相當角力相抵漢武元封二年作角

觝戲史記李斯傳作觝抵張騫傳作角氏と云えり角を競ふ

觝は抵より唐山の俗語は言葉戦を角口といふものと同一角觝は力士牛頭を

戴き而々相當り相抵し勝負を争ひその形勢宛闘牛に似たり是則今の

角力の權輿なり闘牛ハ本邦にもより越後州古志郡二十村に在り人よく

これを知らるるも吾友鈴木牧之ハ越後魚沼郡塩澤の里長人の云る庚辰年

春二月二十五日ヨリが為するの地は赴きて闘牛を觀るもつづ圖説を為りて

わづらう牧之云二十村ハ地方の惣名ハ闘牛の地所ハ定りたるを毎歲三四

月の間雪の消果るまで及びて寅申の兩日の吉辰とせりてその日ハ牛の

角突と唱ふ原是件の村々の城壕を十二權現の祭祀よりてその戲を與

行むといふこの闘牛の光景ハ本輯第七の卷に載へ置けり其具は左の

圖と合へるべし原圖ハ牧之の筆するもの紙中甚闊し且二三頁ありを縮

圖して漏さば哀めて欄糸一頁の中は盡せし画者溪齋の筆力ハ成なり

上古ハ陸奥ハ越後近江ハ夷俗ハ擬せられて夷長を置せしなり

國史ハこれをえられぬの闘牛の戲ハと云ふ風俗の波及するあるを昇平

既ハ久しうき邊鄙ハ文物ハ乏なり今ハ東奥北越の盡処までも夷め

事ハ物ハ下

其遺製ハ

又闘牛ハ

さるるのちあはれこの闘牛の戲の偶越後は遺り古俗を知る端崖るんや。倘

崔安潜をして世に在り神遊て見ま欲するべし。崔安潜好省用牛。見五雜俎人部云。

因ふふちねい。と麻田筆。拂林狗の種類あり一名ハハ狗一名馬鑑

狗又それを獺子と云。唐高祖武德中高昌名獻狗高六寸長尺

能曳馬銜燭云出拂林中國始有拂林狗。唐書。天朝ハ則

淳和天皇の天長元年渤海國より契丹名の獺子を獻せ。作類聚國

史。殊俗云。淳和天皇天長元年四月丙申覽越前國所

進渤海國信物并大使貞泰等別貢物又契丹大狗二口

獺子二口在前進之。天朝ハ異邦の小狗あるべし。

獺子の拂林狗子類せる矮狗之天寶遺事云天寶末云云上夏

日嘗與親王基令賀懷智獨彈琵琶貴妃立於局前觀之

上數子將輸貴妃放康國獺子於坐側獺子乃上局局子

爲上大悦といふ。獺子と云ふは獺の子を想像るべし。拂

林狗ハ稻若水の本草綱目別集に留青日札肇慶府志吳縣志に

引く考證あり若水云今之矮狗即古小獺之種蓋與中

國狗交而漸高大者也馬鑑狗長四寸可藏之馬鑑中。留

日札。番狗長毛庫脚身絶小高四五寸爲哈叭狗來自京

師最貴。大小者有金獅鬬獅志。今按。按。近來。の

間ハ畜る小獺ハ絶小きの種あり今の小獺ハ八種あり。そを漸高。生

活するもの。俗呼を倭くハ所云八種ハつまり。ちんわけ。かづり。小。か。ら。

ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。

ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。

ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。

ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。

ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。ちんわけ。

頭ちひさく眼大なるのこれを上品とて考むの鹿骨之瘦々その脚長き
 の下品とて考む琉球より来る小犬とて考むの琉球犬とて考むの土の小犬
 と尾毛生るるといふこの故にその耳垂まきとて形圓をまきとて小犬と地犬
 とやうりて生れるをいふ又紅毛犬と尾りて生るるあり紅毛犬の地犬よりちひ
 さく穀食せむ或は魚鳥或は琉球芋をこれに養ふて強て飯を食むれば
 稍大きくなりよの他小犬を養ふるさうぐの口傳あり且常は用ふて死禁
 方子を産する時のさうりぬをいふとさうりぬをいふとさうりぬをいふとさうりぬをいふ
 示さるゝと思ひつゝある暇のあるとふけは久しうきく沼果さるきよのさ
 るの崖略のさかきと八犬傳の名ありあつ小犬のさうりぬ漏さるとを諸記の
 ちひさく思ふ

文政十一年丁亥冬十一月大寒前六日

葛笠 七逸



南總里見八犬傳第七輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第七十回

指月院に奸夫淫婦を伴ふ
難庫中に眼代戌孝を捕ふ

再説泡雪奈四郎の豫ての奸計行はむ木工作は辱められて只その怒り小堪
 ざりけは折戸口まで追蒐つ携り出る鳥銃を木工作と戦ひ殺せよこの時下
 哺て且奈四郎が住ひする幾十坪の第宅ハ躑躅が崎の城外有底坊より
 けと人の往還の稀ありこれを知らぬなり然るより奈四郎が奴隸堀内
 堀内等々木工作が亡骸を隠して鮮血を流しゝるを現悪人の
 下は良僕あけは這堀内堀内木工作の心は主は劣らざ好事ありと疎くて
 悪事ハ骨を折る無慙の癖者共々此の目より廻り速きを後々まで

村盡処をぞぐゆきつ濱路の宿の發りしそ衣引被さそ臥てをり緯の不便は
 足のもろで婢共もこの二夜さ睡らざりしは疲労果て呼べども早き起のめめ
 まは百多のひより焦燥くうち咳くのめいひる。かる時め盗見の用心を肝要
 ありとぞ之へ聞て程もなき背門の戸を復鎖んそ庖福口より雜庫の背を
 遠く家尻を出し頼被りせし一箇の癖者背門のなかりし立在をり夏引を
 足く遠く被りし手拭を握合るをぞれは別人ぞぞ奈四郎が奴隷媼
 内之登時媼内は且四下をんかたりて懐きあがりける艶顔を見直しと遮るといふやう
 妻細のるのるの消息は載せられてめんが面會するぞ稱する火急の密談いふ
 けの末の比をよ石木の指月院へ来りて彼処で候んといひまゝ。時刻を違へぬ
 を其けり領きしそめめくべしとまきまゝなりて迷子騷動索は出さる
 小断ホの昨宵の候きもどかへねば留守まゐめめめめ。さばさば左右もして

せんといひ。とぞしとて筆把る暇のめめめ。田輪に進むも先折かゝる
 俗まどこそ端きめめめめめ。今も人の歸来を怪められぬいふ
 せん。とぞしとて。このまは媼内より来てふらけ件の処を来ぬてと期を
 推して立別しつゝも拭き面を隠して足もきと還るを要時目送り。夏引は
 背門を引開く雜庫の底間にて件の艶簡の封皮を折て讀了り引裂て小
 石を包み推圍り傍の溝瀆へ投棄て母屋へ入りける程は昨宵夜は彼此と
 空行せし出来ぬホの迎へ出る信乃は俱して急動揺々々と歸來つては
 後我隊の村人ホも立かへりて遭ぬ恨を罵々と夏引は被てけり又おぬ
 人ぞより易く索ありて手配せぬ折め神佛の利益を祈るは優てあつた
 らよく深信あると衆共侶も慰めて裏面へも入る。門邊より各々家路へ
 いまきけり。さうけり。程よめこの日も亭午近くなり。夏引は奈四郎と約束の

時そよめんと必ふのき氣色ふも願さば濱路が枕方へ赴きて昨宵より村の
衆をて部して索あつた下は大人の往方へ知とぞとぞ躑躅が崎ある十字町ぬ
奇しき賣卜者ありと便ぬ今より彼処へ赴きて大人の存亡安危を問ふく又
石木へも立ち寄りて被れり名する八幡宮は祈願をうけむと必ふ納戸は心をつけく
こゝといふ濱路へ起直りて家尊大人の死に往方のけやで三日左右あるに淵田
滾落と空しくあせめあふむや亡骸ふも見えぬ神隠しといふのめく
誘引とてや亡骸ひけん想像のまじりてあつた時め在るゆも甲斐又きこの女
子は信光といひつゝと泣沈め夏引の声を励めて意忌きるあひひを夜も
日もまゝ泣くやとてかぬ人の出てや来べき留守とて寤めていそぐ衣を脱
更く信乃出来人ふ云云とよりを告留守とて来ぬ宿所をかく足むや石
木のくまを赴きける抑甲斐州石木の御へは假る八代郡は在りこの地方いへ

山梨郡は属する或の石木御は武田大膳大文信光以来館全うてこま
住り信光より十世の君刑部大輔信綱の時躑躅が崎へ遷りてを又一説は
信綱の父信昌の時躑躅が崎は新城と築き石木より移住ぬといへり
さば石木の城迹へ今亡失せと定るるも且移徒の世代歲月も両説ふく
分明ぬぬ姑く後の一説をとり用ひくこの編ぬ信昌父子當時既に躑躅が
崎は在城のよをいへり又猿石と呼彼を地方も今この地を見らぬ彼奴の地
理する人いふあづり知るよりぬ一問話休題この時石木の御盡知ぬ指
月院と呼飲するいと編小なる禪刹ありけり住持の老僧は近曾遷化し後
住の法師の道徳高き日毎錫を鳴り鈴を捧げて近御を修行するは
人一面より一銭の外を受けぬ或へ里人の夫婦角口を打つ罵る煩悩の門
邊に立在り一時或は悪少年ホガ故もあつた物の命を捕らんとする奴へ行あ

ゆ折れ必されを推禁めて因果觀面輪廻應報の理りを説示し愚痴の
夫婦を和け物必死と救ふとこれ彼共は言ふれば人會隨喜喝仰して活
菩薩と稱へけかりければ件の寺に前後二代の新地にて墳墓累世の檀那
るまは住持の日毎は修行は出く只養縁とて更とて在院の日の稀れは参
詣の人も罕なり院中常は寂實なり留守するもの火打水汲む唯一箇の
道人と年十四五の沙弥のあり沙弥も住持の後を折々修行は出くが
昏々宛無住に似たりと住持の俗縁ある他郡の客の寄宿して久く還
留するとあれも栗木も言く晝の出く晝昏毎はかへ来ぬ人その客の
あつても知らず縛跡とてこの寺を昏無住院といひる例の人の癖あるべし然
池雪奈四郎は指月院の爲体と豫知するのれ今朝夏引は密書を
贈て彼外で會んと約束し時刻を料りて宿所とせし後者も堀内人を

將く件の御子赴きつかの蘭若の門前を櫛賣る茶店に尻を掛て今
今と傍程は前面よりある女房あり是則夏引の堀内をやり外に出てを
抗て招くが夏引は馳走走り来ると早かりとぞりふち合言笑むの
何事もなかり俱に床に尻をうて一碗の茶を喫了と奈四郎は堀内は
煎茶の價を取るとのひつ出く先き立夏引は頭巾を深くして少許
後より立程は堀内は遠く錢十四五文の足並とあると堀内は財布の
紐を結びめめ既より主の後方に従ふりかく三人の程も指月院は
来りけり南門より進み入る道人は北に氷と雪を糞りて摧きそり
登時奈四郎は道人より對ひて院主は修行は出あひて秋草より客は
めめやと問はそえたる道人は糞柄杖は突立て然る院主は出られ
一日暮るふかへ客のけり客のいふなり所要のるめめ仰置るべし



消失く木工作が亡骸のふれ足まゝ頭を出ん當下を云々固様々々如此
如此に詐欺りて信乃を泥庫に捕籠え叔介后に信乃が刀は大猫をの血を
塗うして鞋に飲め措くやゝ勉人ぬ多知くはあひをかくるは計策の十二
分は成るゑ既に信乃を捕籠措てまゐるや眼代る甘利兵衛元が宿所
到りて云々と訴ゑ然るに兵衛の時を移さず親兵衛を随へ走向ひて矢庭は信乃を
捕捕るべし縦信乃は伏せざと冤のうと陳するも刀は鮮血の證據あまはるの
陳状達せし獄舎に繋ぎえと疑ひありこれ亦甘利が黨はヨク賄賂を贈り
る信乃は刑罰を俟せし獄舎中を殺さるべし叔又濱路に豫てより信乃と密
通の罪ありと倡て宿所を告るにその身價をそれ彼の事の没後を補ふ足
ら斯く信乃と濱路とを結果て介后は四六城の家の名蹟あり里人の子共
が総角を養てそを家事を政えし日亦木工作と山獵の友なる

義をりて外より後見を以て倡て親しく交加するに至る木工作が送財山林の
利潤をとりてその物るべしこの計策もさうぞとこれを忘まへ誇負は辭
急し説示せば夏引は只顧感謝して叶ふや智恵無量なる世は憑心れた子
ぞう濱路の元來拾子され縦遊女は售るとも障りと見え人へその計策
妙こととて譽めて已に奈四郎然とて頼賢拊て現濱路は木工作が実の女
児をばうと人の噂はやゝかゝる具なるをさや實の親知れやと問ふ
夏引は頷きて原來を語り知らずやと濱路は二三才の比就鳥をを攫ま
けん黒驪と中山の山間を樹の枝に棲して立ち泣て侍りてを如此々々の事あり
る人へ出でてより却て宿所を將て来る字育る女児をさう。渠の貴人の息
女をわけん彼樹枝に在りて是七宝と描箔ありて條龍鷹の吸章ある袷
衣の袖長きを衣て下衣緋の衣を襲いとを其執身衣の衣共を今か

おは納戸の葛籠の底に藏めてあり拾ひ取るとその比の古もあらずね
 稚児を何といひえその名も知れぬ餌漏とやん名づけられぬ絶て応を
 するところ三不圖せしめて奴婢を濱路々と呼べと使て笑つて応とて
 ければ原來この子の舊名の濱路とんと猜しつゝ馳て濱路と名づけとぞいぬる
 夜信乃が亡妻の濱路とくらへるふ就くこのも亦る人の物なりぬ
 人の知りぬ憶漫々奥より来りて並る言はし時のや根らん叔母あやふふして
 この寺の住持もどうも人影のあはれをく知りて商量候ふまゝひるこれ奇
 妙な侍りかといふ奈四郎も笑てあはれ和尚日毎々々修行し出暮
 後へらと書へ人影のあはれをて世の人達は緯緯と書無住院といふや
 豫てやいふとめれば且試す来てらるや世の風声は違ふと鹿谷の俊寛の
 別荘のゆかり妙之既し所要の果ては寒も一不堪と然る茶を用ひ

とてどう奇措る果物を披け馳て頭と出る木地臘の吸笛小車宮鶏
 卵烹魚焼鳥と散り仰飲る茶碗酒忽地腹は満ちのこつ酬つ餘念も
 牝牡無慙の癖者ホ素より佛地を憚らぬ寒風袪て春心揺動き密談
 果てはいふも又何更をうけやん霎時を在る音もせば鼻息のそそ暴
 かりける既しこの日も傾きを晡時より一か奈四郎は誘ゆんとて夏引が畏む
 吸笛と車宮を引提て立ちと死四下とるる彼道人は何処かをそこら
 人影あふむ首尾のとすと舌を吐き竊に夏引ををがうと外面赴き
 堀内を招寄する既し日影を追失くす不樂なり堀内の遠く走り
 来る二隻の草履を推直まを夏引いと抗うち戴きそそく足より穿
 らる奈四郎は果物ををか伏し又堀内よりくく二人悠々と寺門を出る大
 膽不敵能やを謀り課せる伎倆を悟る道人この時既し掃除をまて

奈四郎亦茶を薦んをむり庵漏れ退きて地炕に折焼く薪柴の燃ぬ
生木を吹折られ渠ホがてぬ死をまゝせむる茶金の沸揚はけし初め
茶碗を取んとそ漏室へぬて見よ奈四郎ホ居るなりあゝと語りて
又外面へ走り出て彼従者を多く呼ぶ絶て心なるなり原来院主を俟
まひて彼主従いかりあひえ宿所も名をも問ふけし院主は何と教ふ
脱落はけりとむりてかゝる深く疑ふ素より愚直の老人を欺しを
多々曉得らむとの餘念成と呼まする年十四五の小僧あり渠は住持に従ひて
日毎に修行し出れども足の戦を踏腫れ起居もやゝ不自由なれば且修
行を暫と稱ふきりより竜居るが件の漏室を板壁の背に住持の便室
廁へかゝる長き縁頼み且正南をけし終日日光のさし入れていと暖る
処とぞと念成は奈四郎ホが来たり前より彼縁頼み出でる曝背心地

よはひに細半の風を拾ひつゞけたる奈四郎と夏引が悪事の密談を一
箇も漏さずせりふその性記憶は捷なり後々も竟に忘るる院
主のかつを俟著て緋云々と教ふるあゝ只天のいさるるべし嗚呼奸賊の
人を謀るや奪ふその智の長るる敗るるを慮らざる故に鬼神を欺く
邪計あるも敗るる至て甚思之彼楊震が四知の誠をば亦怖るる然程ふ
夏引は指月院を走り出る途に奈四郎主従と立別る宿所は還るに既
多く日は暮るる故に濱路ホうち對ひてけし彼躑躅の崎を賣上者許赴て
大人のうを占向ふ生死決定するものも而三日のあつて五日耗のわし
めはこれ聊慰めて石木の八幡宮に参詣し奉りて他通途の神社佛閣へ
詣て祈願をかけしふるなり時を移りぬ什麼幾里の路ありけん彼旁
果てはるるといふ濱路へ頃日の憂苦を聊慰めて婢共を呼立て母の爲す

洗足の湯を汲み夜食を薦めて大々るる勸りけり。登時夏引の肚裏ひより
 ぼろくろぬき、奈四郎の示さる計策よとの人も一人、身の資をいそ
 ぶるは不便、人出来ぬれば比より濱路は心あづけるを、竊に渠を引入て
 資おせると尋思をさる。僮僕共々今宵も亦木工作を索ふが出来ぬ風
 ひきこると、獨宿所は在り、折てさうと欲ひて人を見聞を窺ひつゝ出来ぬ
 耳くやう吾侪はさうと躑躅が崎へ赴きて家公の安危存亡を賣卜者ふ占問ひ
 一ふ劍難の卦の顯とされ、比宿の逗留をほろ客の所行ぬやあんなのひ
 かま信乃が所為さるべし、渠の濱路を妻せんとし、待つてまゝ家督と
 奪んとてさる。あそふたうとある、欽也も亦側がうとある、あれども證かけさ
 漫子人の告がこれとさる。胸は秘て事の證據と見出し、吾侪を貸けて
 家公の仇を討さる。配り肝要とんと働きて大功あふ、濱路とさる。あま
 四六城の家督はまげれ、虚々とかあるひを、いそと勢が出来ぬ、異議及ぶ
 諾あひて仰るけり、いひぬ現推量ある、家相續を待つ、信乃が所行を
 あんむん今より彼奴は目とつけて證據と見出し、いん憑く思ひ、石とよと
 精悍を耐え、あそふたうとある、夜更願て草木も睡る、五三比奈四郎が奴隷堀内
 堀内は彼亡骸を早めて、四六城が宿所の背門を推し、夏引が女中の左
 側は鎖を外し、指さる音もせず、開き、いそと件の悪僕、泥庫の後のこ
 宿所のいそと、且活大根の為、あんな穿ける穴あつとんと、あも究竟と
 その穴へ木工作が死骸を滾して上、壞を少許を被け、又その上を雪を埋めて
 密とせ、死背門の戸を舊のどく、引寄して躑躅が崎へ還り、を知るの絶て
 るりける、かり程この曉より、大く南風の吹随、背門の邊は氷る、雪の
 三がッの消はけり、既ふて天の明て、鳥の声は覺され、出来ぬ、浄とせんそ

四六城の家督はまげれ、虚々とかあるひを、いそと勢が出来ぬ、異議及ぶ
 諾あひて仰るけり、いひぬ現推量ある、家相續を待つ、信乃が所行を
 あんむん今より彼奴は目とつけて證據と見出し、いん憑く思ひ、石とよと
 精悍を耐え、あそふたうとある、夜更願て草木も睡る、五三比奈四郎が奴隷堀内
 堀内は彼亡骸を早めて、四六城が宿所の背門を推し、夏引が女中の左
 側は鎖を外し、指さる音もせず、開き、いそと件の悪僕、泥庫の後のこ
 宿所のいそと、且活大根の為、あんな穿ける穴あつとんと、あも究竟と
 その穴へ木工作が死骸を滾して上、壞を少許を被け、又その上を雪を埋めて
 密とせ、死背門の戸を舊のどく、引寄して躑躅が崎へ還り、を知るの絶て
 るりける、かり程この曉より、大く南風の吹随、背門の邊は氷る、雪の
 三がッの消はけり、既ふて天の明て、鳥の声は覺され、出来ぬ、浄とせんそ

背門のくふ赴きてるれば雜庫の後より活大根の穴の邊に斑消る雪の中より死人の足の頭とてさばきいふと驚駭きて事のつくと叫ぶらん。何るぞと俱ふ駭く婢共先立ち信乃いちちち走り來り夏引濱路も忙惑ひて齊一背門を出て見る。現疑ふもあぬ活大根の穴の中より死人の足の頭とこれいふと駭き且訝る。出来ぬ雪を撥し信乃も亦は仰て穿かしてこれをみる。あつ木工作が亡骸は紛へるものされば周章悲愁限り。るに圖宅の騷動沸かぬ濱路の父の亡骸は推乃死伏枕して声を惜まぬ。啼哭を慰めぬ。婢共も與ふ涙をぬれ。登時夏引の目と拭ひて叔を浅くや。大人へ何れのか救うまで。いふ埋められ。身を神るぬ身のもて。遠く素一悔。さ。雙言敵と誰と。さ。の心當り。あ。や。と。虚位。あ。かき口説。出来ぬ。さ。と。歎息と察する。家公の雙言敵。遠方の人。さ。と。四鄰比屋。秋。さ。と。

家の内も測りか。阿家。さ。の。さ。の。位。の。ひ。を。終。の。仇。を。納。盡。出。て。終。を。復。さ。で。や。已。ん。且。く。俟。せ。ぬ。の。ひ。と。い。ふ。腕。を。折。り。て。信。乃。と。見。え。疾。視。る。氣。色。は。信。乃。の。心。も。ほ。そ。頭。を。傾。け。ぬ。と。さ。き。さ。き。不。見。の。嘆。嘆。堪。ぬ。愀。然。と。く。左。右。を。見。か。り。出。來。ぬ。の。推。量。の。さ。の。い。ふ。似。さ。れ。ぬ。の。あ。つ。の。仇。の。い。ふ。七。死。骸。を。い。ふ。埋。ん。や。あ。つ。の。人。の。夜。の。紛。と。て。他。所。より。ぬ。さ。と。捐。さ。る。秋。と。れ。も。亦。知。る。べ。う。と。さ。と。さ。ま。れ。か。ぬ。の。あ。つ。の。父。の。母。の。親。は。仕。へ。忠。義。の。老。黨。主。の。為。に。追。腹。切。る。の。ち。の。い。ふ。後。の。美。譚。と。り。あ。つ。の。子。の。理。義。は。怜。惻。く。て。善。し。與。一。惡。を。疎。か。犯。せ。る。罪。障。多。う。ん。ぬ。過。せ。ぬ。紫。報。の。か。く。非。命。は。終。り。け。ん。と。さ。の。仕。さ。り。時。飽。を。耽。り。我。生。の。因。果。を。あ。つ。の。廻。り。來。て。今。の。歎。き。を。遺。す。の。の。秋。む。唐。の。孫。真。人。の。生。と。起。て。死。を。固。ま。仁。術。稀。世。の。名。醫。と。れ。と。も。千。金。方。と。著。し。七。水。蛭。蟲。鼠。鼠。類。の。活。る。物。を。と。某。刑。に。加。え。る。我。生。の。報。ひ。より。齡。九。十。止。る。の。仙。と。

正とゆふなりとて現天道の生を好く殺を憎むをいふは神の心なり。
 木工作更々非命の死も彼殺生の被ひといふは何をぞ又善と勸めいと惜むべし。
 ぞむべしと繰返すうち歎けぬ出来ぬをいふは宜しとて物因果の
 有はるもいふ人を殺してとて死骸を贈りてその家の背に瘞る馬鹿のあつて
 や燈臺屋還く下暗しといふ常言もあるのを仇のあらぬ道遙と在るのまじき
 べつべつといふを夏引の推禁めて出来ぬ漫ふのをいふは目上骸をいへて眼
 代はるこれらの事を訴ふらんぞとていふ出来ぬ立ちあがりてそのあつるくへいも
 甲乙もどき歸らぬこのあひとでせん術あつて誰か傳へてあつたやといふ信
 のも進よりてられ傳へるはなんぞ足方を揚と二人と吊り便室のむ
 へるははははとてあつたは濱路の西箇の婢共は技披且て亡骸の後を跟は
 ずるも母屋の入れと又さふ發する瘡の苦げると人も屈するのふとと問ふ

のめあつるのり。當下夏引の信乃出来ぬと額を合と相譚ふ。五右衛門今
 より鄭躑躅の眼代さへ赴きて所天の横死と訴ふらん先づ眼代は近曾
 身よりいひが甘利兵衛元と叫ぶ。あつたは新眼代を隸られり。あつたは目め
 被らぬ。彼れへ宿所も知れん。叔訴ふらん。展覧の為甘利さるの時を想
 さま。あつたは茶碗果子の餘の物も準備せり。不便客前の家具は雜
 具の雜庫の矮樓の在り。俾多々大塚の出来ぬと繰返す。あつたは
 頼る信乃の二議はさふとて易きものなり。さふ案内をせよといひつ。軀て
 身を起せば出来ぬの先立て信乃共侶は庫の戸を開つて。矮樓の登るを
 夏引の急あしより立て出来ぬと来よ。尚別は分付るものなり。獨り来よ
 や。南と呼返されと出来ぬの又遽に階を下りて。あつたは候著る夏引
 透さる庫の戸を楚と引。閉鎖を固と叔出来ぬ如此々と事情を其さ

小人は欺まづこの庫へ捕竜れらるるべし。渠ホと争ふとも鄙語の
川向ひの聞諍は似くその詮を遮莫武田家の捕の兵走向なる折
を論辨してこの冤を以釋べしと尋思をうつ諍を再矮樓より登
りて武田家の眼代を俟と大約一晌をり只憤血を充て恨のあせりける。
然程は八代一郡の新眼代甘利兵衛元へ肚甲の野將束と錫粉袴を
面刀を跨へ究竟の戦兵四五名と雜兵二名は篋子を吊せと前後は徒へ四六
城が宿所の門邊より者共出ると呼立まば小廝出来人走り出額を地上に搦
つて小人即木工作が恩顧の従僕出来人と呼するのめをいへといふ元
領きて出来人と云ふ兼と嚮は木工作が後家夏引が訴するをふり則木
工作が横死の尸を展覧し且犯人大塚信乃成孝并は信乃と密通の彼えある。
濱路と搦捕ん為甘利兵衛向ふ。但し夏引の故めて且く三が宅に留め

う。つづこの義をあらためて案内をせよといふがせふ出来人わさく兼とね
と心して先立つ木工作が死骸のやうに請まれ元ちりて眉を頻りこの
瘡口を疑ひあれどもその後の沙汰は及んやれ出来人彼血刀をくみせといふ
出来人編室ある桐一文字の短刀と搔合めを来てさうおせ元元受と搔合
ちとげくといふ冷矢大ひ位と疾視て声高きやをれ出来人元ををき木
工作が敷まれ四五日已前のものといふ元は塗まこの鮮血は乾き酒ひ
ありこれ彼共は訝れをあら又後の沙汰は及んされこの短刀の俵は石措くべし
いひつ軀を斃し斂め野兵は遮ると左右を見かへかまふ今さう信乃とく犯
人と定めり。されども亦夏引ホが訴をせしめあれは搦捕んと勿論を泥
庫は案内をせよといひつやを床とるちて庫の戸口は封きて銅網の戸の間
より矮樓よりわけて声をあう立武藏の旅人大塚信乃の木工作と残害の緯の

趣後家夏引ホが愁訴よふて當郡の眼代甘利兵衛元が向ふて
 對面せよと高き呼るを信乃はつ些も騒がずあつ階子と下立て某犯
 せる罪あつむ然るもの仇といふ家族の証言是非及ぼ只賢察を願ふの
 と心て立在む銅網の透より甘利元とらえん猛臆けんち驚きける面
 色と元とそと透りて出来ぬ庫の鎖を開けそくせよと焦燥阿と心
 傳鍵より出て開く戸口兵衛兵共十手と採て捕卷る登時信乃は庫より出て
 元元より對ひ目今既陳あるごとく某の木工と殺害するのめらんや
 但その縛の趣を召問るや何ぞやと牽あやう解まが親ありかとも
 縄を被けらるやといふ元元領きそ勿論のこり。あつれも罪の有差の
 虚実の定るぬ縲紲へ用拾せんその腰刀と遞与されよといふ只武士の情ゆを
 といはせ信乃は感謝ぬ堪む村兩の名刀とそ俵合てき寄ると一箇の親兵

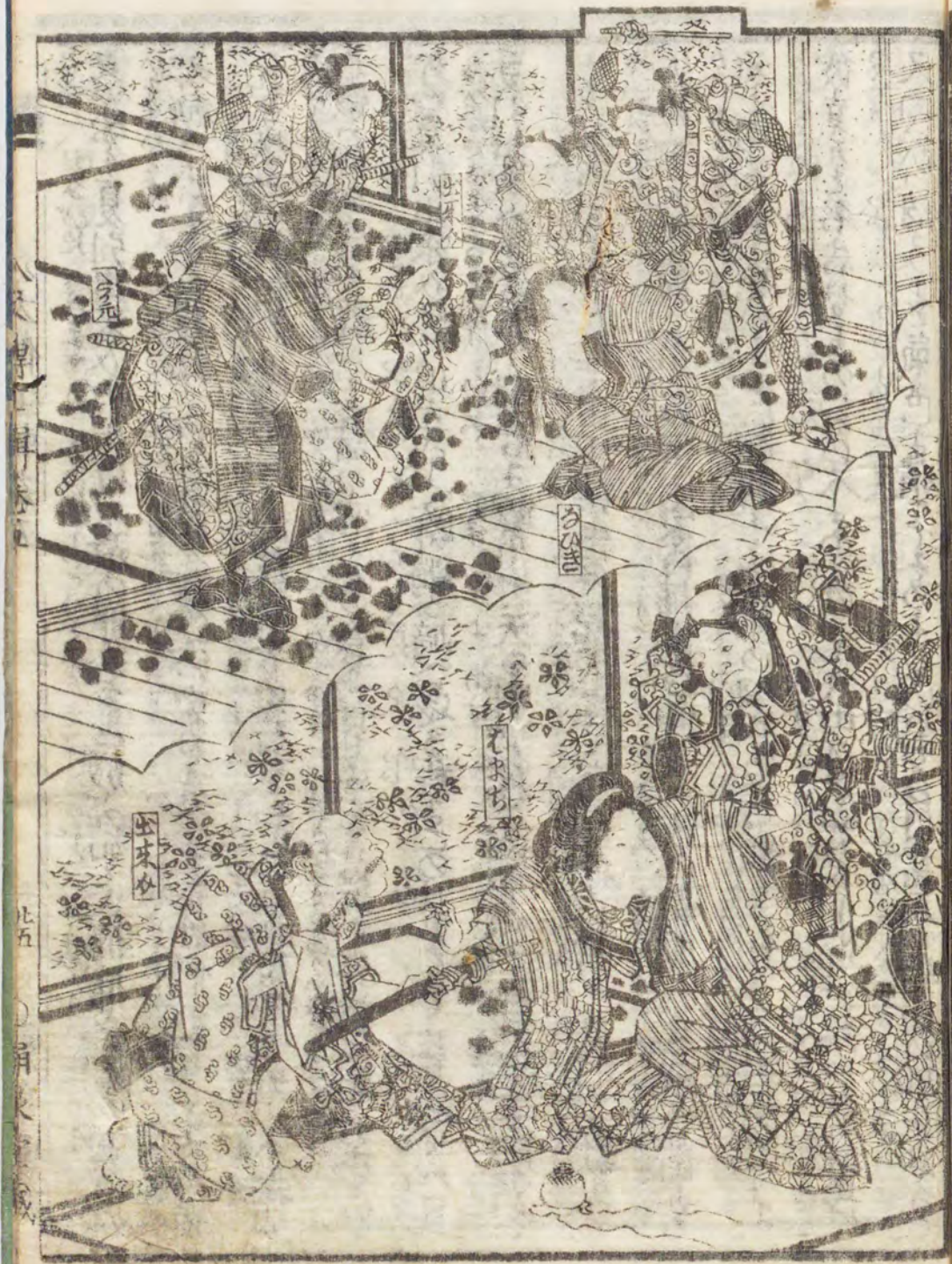
受取り既め元元又出来ぬと呼び近づて木工が女見濱路とせん
 も信乃が拘つて穿鑿せむのあまづ捕て將くゆべ渠の病の
 うやえて且少女子のるめれが即便子を吊りま又守のん慈悲又
 濱路が仙より此木工拾まゐるその折は被うとの指指の衣のうん濱
 路は同くしよよこの他信乃が行囊も遺る親兵はこせうといふ出
 来ぬるるて蠹曝の折はてける納戸の葛筆と撥拂りて件の衣とぞ
 又編室の封き信乃が行囊も取りてまのこれ彼共は親兵は遞与し濱
 路が臥る身息は封き緯如此々と被知て技起て元元が目前へ將て来れ
 元元これを憐みて準備の便子あぞ棄せよと濱路の恩高き養父の
 枉死のかきぬをえたる身と罪人といひうつ囚と何とる海の浦まで
 宵の風波立騒ぎ潮をる磯傷如する音ぞ哀とる當下甘利元元

頼甲斐より阿容々と肝要なる信乃と走りて元元と更にいりたる。こゝ追
つて引くと来る。逃して事の済むに救と声戦と敷聞け背後に親兵共侶立
む。元元怒る声とあ立て夏引あまれ胡論の争ひまれば、外明せん親兵
們との西人と捕を脱しと下知し、上座に進み登りて床に尻をうけ、掛
親兵を夏引出来ぬと推捕巻を成ける。登時出来ぬと進み、元元が
うち對ひ、額にたる頭を握をれ、うちめひ、今より半時より三たび甘
利兵衛元元と御姓名と告まる武士親兵四五名と一挺の篋子と品一、本
木工作が死骸を展覧し、又信乃が血刀を引、技見、木工作が身中の残、鳥銃傷の
を金瘡あわむ、この刃、ぬき、鮮血、此も乾を、潤ひ、のり、と、あ、四、五、日、已
前、撃れ、この木工作が横死の時、日と相違ひ、かき、木工作を救せ、のり、と、信乃と、あ、
定め、か、こ、れ、夏引、あ、訴、ま、せ、よ、も、れ、捕、捕、る、の、勿、論、泥、庫、の、戸、を、開、く

べし。仰い、と、い、へ、假、討、手、と、心、も、つ、て、懸、雜、庫、の、戸、を、開、き、姑、く、信、乃、と、向、合、
あ、て、帶、る、刀、を、親、兵、が、受、け、と、信、乃、の、繩、を、被、け、と、親、兵、們、あ、ち、成、ら、せ、又、濱、
路、の、穿、鑿、の、筋、の、り、を、准、備、の、篋、子、の、技、果、し、信、乃、が、短、刀、行、囊、の、り、を、濱、
路、の、木、工、作、の、拾、ま、う、時、被、う、と、親、身、衣、の、衣、を、皆、悉、出、さ、し、親、兵、の、り、を、
越、り、食、の、共、動、揺、々、と、出、行、ひ、た、夏、引、の、肝、要、の、筋、の、り、宿、所、の、留、め、り、
さ、い、金、の、小、人、疑、ふ、り、も、信、乃、と、濱、路、を、走、り、越、度、又、今、こ、の、あ、れ、入、り、
け、い、の、據、る、た、趣、を、御、賢、察、り、下、さ、し、只、御、憐、愍、を、願、ひ、の、り、と、悲、
と、告、る、緣、由、を、元、元、と、い、う、ち、や、と、察、さ、る、者、共、信、乃、が、冤、を、と、知、り、
る、使、者、と、さ、る、た、然、る、信、乃、と、交、厚、き、友、人、の、あ、れ、ん、と、本、工、作、が、
亡、骸、を、檢、覽、さ、る、案、内、と、せ、よ、と、い、ふ、夏、引、の、戦、々、出、来、ぬ、と、共、侶、の、隔、の、
紙、を、推、開、け、元、元、の、進、寄、る、磨、口、を、得、と、る、又、亡、骸、を、穿、穿、し、泥、庫、の、

背ふ到りてその処をうさうち領さ舊の坐席の立かて眼と睨り声高からぬ
 兵達この癖者ふとて捕捕むと烈に下知ぬ野兵ふ兼ねて心も果を走り
 鬼て出来ぬと夏引が肘と操曲の操揚の押と縄と被りぬ西人齊一驚き駭て
 俺們犯せる罪のむとせざるのむ元元と腕と腕と声高き大膽不敵の毒婦主
 従汝何ぞ罪あるや木工作が身の痠痛痠痛似れぬも鳥銃傷の疑ひる
 壁が信乃が木工作の怨ありて害するも人の心なる山陰をその亡骸を棄てて
 消ると知り宿所の背門の雪の中を摩んぬこの両條の推をたぬ汝も信乃の
 然ゆゑと冤枉の陥さんと伎倆するの如れぬ。必色欲めて木工作を害せぬの
 夏引出来ぬとあうんぞん目今緊く打懲らまふ。いふその實を吐く死と
 と脅問せぬ。と妓女の膽と根と理非明亮の識断は野兵ふぬをりて十
 手とあふ肉く夏引出来ぬ背の皮肉の傷るぞお打懲らまふ若痛堪ぬ

川来々へ昨宵夏引は頼まざる癖の趣と首とくその身へ像であの女児濱
 路は懸想しれども竟はその本意を遂ぐ余る木工作が濱路を信乃は妻を
 と欲せと媚くあひて斬く夏引は相譚と信乃と誣る尾りす貝も首伏あ
 けは夏引の脱る路る悪事を遺る首伏さまは泡雪奈四郎と察通の
 緯の趣濱路と信乃と鬱悞くあひて追失人と計較する又奈四郎が木工作と
 撃殺する緯の顛末さる石木の指月院で奈四郎と密會せ折檻謀め
 什て深夜木工作が亡骸と背門の雪の中を埋さるる又信乃が短刀を
 雞を刺殺しその刃を血と塗うて信乃と木工作が仇と誣るる且信乃を欺きて
 泥庫の中を捕籠る始より終りて既露顯ぬ及び元元又家内を奴婢
 杣人本と猿石村の故老の百姓五六名と召聚く夏引出来ぬが首伏の緯の趣
 信乃濱路を奪去る癖者の泡雪奈四郎が積悪の一五十一を詳説示す



又いふ。夏引出来。ふい大辟不赦の罪人。さうか。の如く。捕捕。う。の餘の奴
 婢。仙人。ふい。さ。罪。う。の。穿。敷。金。落。舉。せ。日。も。百。姓。們。か。り。く。日。夜
 れ。を。成。る。べ。又。信。乃。濱。路。い。さ。く。彼。辭。者。の。在。知。を。知。ら。速。め。お。し。お。本。主。作。が
 亡。骸。の。親。族。を。葬。け。う。と。請。を。宜。く。意。を。任。せ。と。言。最。も。告。挺。て。野。兵。ホ。を。い。そ
 ぐ。夏。引。出。来。ぬ。ホ。と。追。立。て。躑。躑。が。崎。へ。還。る。程。この。日。も。と。暮。さ。う。べ。且
 夏。引。出。来。ぬ。ホ。と。緊。く。獄。舎。に。繫。く。て。天。も。明。け。れ。の。う。と。主。君。お。は。え。あ。げ。て。
 その。准。備。と。さ。う。け。案。下。某。生。再。説。犬。塚。信。乃。戌。孝。の。郷。は。夏。引。の。欺。き。て
 泥。庫。中。に。捕。籠。ら。れ。武。田。家。の。捕。も。の。頭。人。八。代。の。新。眼。代。甘。利。兵。衛。亮。
 元。と。問。答。し。て。冤。の。う。と。い。ひ。釋。人。を。庫。の。細。戸。の。透。間。より。初。面。を。對。せ。し。
 彼。亮。元。と。名。告。れ。る。の。い。さ。の。入。あ。い。と。犬。山。道。節。を。り。か。へ。い。ひ。う。ち。敬。馬。だ
 又。い。ひ。い。ひ。い。と。氣。色。は。猜。と。る。の。う。と。い。ひ。さ。る。亮。元。と。對。面。の。趣。は。い。て。

道。節。が。い。る。ま。く。腰。刀。を。野。兵。に。遞。与。て。濱。路。と。俱。は。相。侶。と。四。六。城。が。宿。野。と
 出。し。う。道。節。は。只。管。は。篋。子。を。い。さ。と。飛。が。く。ふ。走。り。か。大。約。一。晌。ぐ。り。ふ
 多。石。木。の。御。の。片。邊。を。指。月。院。を。過。り。登。時。犬。山。道。節。の。濱。路。を。復。し
 衆。一。の。依。り。奥。房。に。早。入。さ。う。從。者。を。あ。ひ。つ。り。來。ぬ。兩。刀。を。そ。の。俵。信。乃。の
 心。で。誘。を。馳。く。案。内。を。い。住。持。の。便。室。に。趣。程。は。い。珍。や。と。い。ひ。り。て。出。せ
 老。僧。の。是。則。別。人。を。も。金。碗。入。道。大。き。只。是。の。ま。の。を。て。蟬。崎。十。一。郎
 照。文。も。目。今。遠。方。より。還。り。けん。行。装。の。俵。め。く。大。と。共。に。立。出。く。み。信。乃。は
 對。面。は。各。々。別。後。の。情。を。演。で。る。恙。を。祝。し。る。歡。び。氣。色。は。頭。れ。を。信。乃。は
 夢。中。の。心。地。と。何。う。も。思。ひ。ひ。と。只。再。生。の。恩。義。を。謝。し。て。且。不。憶。極。ま。る。縁
 由。を。語。る。大。法。師。先。の。あ。う。忘。ま。る。は。四。拾。已。前。陸。月。廿。四。日。の。曉。と。和。殿。の
 犬。飼。大。田。と。俱。は。武。藏。の。舊。里。に。還。り。ぬ。折。約。束。の。目。子。定。り。て。小。文。吾。の。帰

此。故。蟻。崎。生。の。文。五。兵。衛。の。妙。真。も。只。願。は。俟。不。樂。て。商。量。果。し。り。
 然。食。道。大。塚。に。赴。き。そ。の。安。否。を。問。ん。と。謀。月。二。日。の。黄。昏。に。行。徳。より。便。船。
 あり。次。の。目。彼。地。に。到。り。ふ。る。前。日。額。藏。の。莊。を。和。殿。と。大。飼。犬。田。の。之。を。接。ひ。
 する。正。の。趣。且。戸。田。川。の。上。で。大。石。家。の。加。勢。の。頭。人。仁。田。山。晋。五。を。鏡。兵。和。殿。
 犬。川。莊。に。も。敷。き。ま。す。の。代。え。外。島。に。首。級。を。も。て。け。る。假。首。を。心。を。ち。て。
 行。徳。市。川。に。入。る。人。々。を。報。る。暇。も。な。く。只。願。和。殿。も。進。ん。と。下。総。に。赴。き。常。
 陸。に。赴。き。そ。の。下。野。奥。の。白。川。越。路。の。盡。如。を。経。歴。し。れ。も。竟。亦。和。殿。も。は。
 遭。に。西。檢。近。行。脚。て。去。々。歳。の。秋。信。濃。路。より。この。甲。斐。が。峰。に。杖。を。更。て。且。
 當。院。に。同。宿。せ。り。住。持。の。老。僧。遷。化。て。法。脈。を。嗣。の。る。の。う。け。已。と。を。る。必。多。
 臨。終。の。頼。り。住。寺。を。領。り。必。多。の。三。松。を。歴。り。さ。ま。と。そ。の。処。に。長。く。住。ま。
 り。る。ね。い。も。遭。と。不。遭。の。天。多。時。之。縦。日。本。國。中。に。生。涯。幾。遍。も。巡。る。も。時。至。

・大照文
 信乃現ハ
 小文吾ホ
 居カグ
 未見の道
 節ハホ
 亦見の道
 の寺とい
 人秋

此。遭。さ。か。ん。又。この。如。く。留。る。も。縁。禍。の。あ。つ。と。ひ。ひ。け。と。他。州。
 討。め。ど。或。の。三。里。或。五。里。日。毎。に。彼。此。を。修。行。し。て。市。中。の。旅。客。は。心。を。つ。け。果。し。
 去。歳。の。春。に。至。り。て。蟻。崎。生。が。野。兵。六。七。名。を。旅。若。黨。に。お。か。し。て。この。地。に。来。つ。
 直。と。遭。ぬ。より。て。當。院。に。伴。て。食。道。の。志。を。告。ぐ。蟻。崎。生。も。この。語。を。喜。し。て。又。
 他。州。に。赴。き。て。この。年。の。夏。又。圖。る。も。犬。山。大。川。の。二。大。士。の。あ。り。宿。り。と。を。ひ。夜。
 心。と。も。各。生。口。の。ひ。り。蟻。崎。生。も。對。面。に。飲。ひ。の。め。も。と。と。り。て。二。大。士。に。蟻。
 崎。生。と。共。宿。す。當。院。に。寓。居。せ。り。介。後。二。大。士。の。あ。り。三。人。鼻。を。衝。合。て。と。と。ん。の。
 亦。孟。子。が。止。む。莊。と。道。即。ち。或。の。一。年。或。の。半。歳。矢。代。は。遠。方。を。國。を。巡。り。
 大。塚。大。田。大。飼。亦。并。に。大。江。親。兵。衛。の。存。亡。を。索。極。む。べ。い。か。く。遭。れ。る。一。大。士。
 蟻。崎。生。と。部。と。て。近。郡。近。國。を。遊。歴。せ。ん。か。く。件。の。四。大。士。は。環。會。る。の。め。も。と。と。ん。
 當。院。に。伴。て。會。所。の。一。人。は。遭。て。一。人。を。失。ふ。離。散。の。愁。る。る。べ。い。と。商。量。

既^も定^まりし^{こと}を^も三^{さん}天^{てん}士^し父^ふ代^{だい}と^も今^{いま}日^ひよ^も至^{いた}る^{こと}を^も今^{いま}茲^{ここ}大^{だい}川^{せん}生^{せい}の^{りょ}旅行^{りょ}の
 年^{とし}番^{ばん}より^も武^ぶ藏^{ざう}下^げ總^{そう}常^{じょう}陸^{りく}陸^{りく}奥^{おく}出^で利^り越^え後^ご信^{しん}濃^{のう}の^{しち}七^{しち}个^こ国^{くに}を^もう^もち^て巡^{めぐ}る^{こと}を^も
 如^{ごと}月^{げつ}の^し比^ひ首^{しゅ}途^とせ^りつ^との^も歸^{かへ}来^きる^{こと}を^もか^かき^てま^まの^も例^{れい}の^{ごと}如^{ごと}く^も食^{しょく}道^{だう}の^{きん}近^{きん}村^{むら}へ^も参^{まゐ}り^ま
 出^で発^{はつ}大^{だい}山^{さん}生^{せい}も^も登^{のぼ}り^て日^ひ暮^{くれ}され^り寺^{てら}す^へく^もむ^も蜜^{みつ}崎^{さき}生^{せい}の^{きん}隔^{へき}昨^{けつ}日^{にち}より^も郡^{ぐん}内^{うち}へ^も赴^{おもむ}き^て
 留^{とど}守^{もり}の^も無^む我^が六^{りく}と^も老^{らう}僕^{はく}と^も念^{ねん}成^{じやう}と^も沙^さ弥^やの^もを^も浩^{こう}如^{にょ}の^{しち}四^し十^{じゅう}前^{ぜん}後^ごを^も一^{いつ}箇^この^も
 武^ぶ士^し三^{さん}十^{じゅう}の^もま^まる^も女^{にょ}人^{にん}と^も一^{いつ}箇^この^も奴^ぬ隸^{れき}を^も將^{しょう}々^々當^{たう}院^{えん}に^も詣^も来^きり^て無^む我^が六^{りく}の^も中^{ちゆう}の^も無^む人^{にん}の^も
 趣^{すゑ}を^も訊^き問^{もん}す^{こと}住^{ぢゆう}持^ぢの^もか^かと^も俟^{まち}し^て無^む我^が六^{りく}の^も粒^{りゅう}銀^{ぎん}一^{いつ}顆^かを^も取^とり^て女^{にょ}人^{にん}と^も共^{とも}に^も裡^{うち}
 面^{めん}を^も入^いり^て偏^{へん}室^{しつ}を^も居^ゐる^{こと}を^も久^くく^もと^も哺^ぶ時^じは^も皆^{みな}せ^りと^も父^ふの^もま^まり^て小^{せう}の^も念^{ねん}成^{じやう}の^も
 足^{あし}痛^{いた}の^も愁^{しゆう}の^もま^まる^も寮^{りやう}の^も簞^{たん}と^も徒^た然^{ぜん}と^も堪^かへ^ず彼^か偏^{へん}室^{しつ}の^も板^{ばん}壁^{へき}を^も隔^{へき}し^て縁^{えん}頗^{ぜん}の^も曝^{はく}
 背^せを^も伏^ふせ^りと^も其^{その}件^{けん}の^も男^{なん}女^{にょ}の^も密^{みつ}談^{だん}を^も竊^{せつ}聞^{もん}し^て武^ぶ士^し八^{はち}圍^ゐ守^{しゅ}の^も家^け臣^{しん}を^も池^ち雪^{せつ}
 奈^な四^し郎^{らう}と^も呼^よぶ^{こと}の^も中^{ちゆう}で^も女^{にょ}人^{にん}の^も猿^{えん}石^{せき}の^も村^{むら}長^{ぢやう}四^し六^{りく}城^{じやう}木^{もく}工^{こう}作^{さく}後^ご妻^{さい}を^もて^も其^{その}名^なを^も夏^か引^ひ
 と^もい^ふの^もも^も奈^な四^し郎^{らう}と^も密^{みつ}通^{つう}を^も情^{じやう}由^ゆの^も定^{ぢやう}ふ^{こと}を^もれ^り加^か以^いい^ふ頃^{ころ}より^も和^わ殿^{でん}の^も
 木^{もく}工^{こう}作^{さく}許^こ遠^{えん}由^ゆの^も緯^ゐの^も趣^{すゑ}又^{また}木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も女^{にょ}兒^に濱^{はま}路^ろの^も拾^{しゆう}子^しを^も二^に三^{さん}才^{さい}の^も一^{いつ}比^ひ就^{しゆう}鳥^{てう}を^も
 必^{かならず}攫^{かく}と^もん^{こと}黒^{くろ}驪^り中^{ちゆう}山^{さん}の^もや^やる^も樹^{じゆ}枝^しは^も挟^{はさ}れ^りと^もり^て時^{とき}七^{しち}宝^{ほう}を^も掲^か箔^{はく}め^りと^も條^{じやう}龍^{りゆう}
 膽^{たん}の^も股^こ章^{ぢやう}の^も袖^{そで}長^{ぢやう}き^き袷^{あし}衣^いを^も被^かて^り下^{した}赤^{せき}緋^ひの^も衣^いを^も襲^{おそ}ふ^{こと}を^も其^{その}衣^い共^{ども}を^も今^{いま}も^も衣^い
 木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も宿^{しゆく}所^{しよ}の^も納^{なつ}戸^との^も葛^か籠^{ろう}は^も藏^{ざう}の^も中^{ちゆう}に^もあ^あり^て又^{また}木^{もく}工^{こう}作^{さく}の^も四^し日^{にち}前^{ぜん}は^も奈^な四^し
 郎^{らう}を^も撃^うつ^{こと}と^も并^{なら}に^も木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も亡^な殿^{でん}の^も昨^{けつ}宵^{しやう}更^{せい}蘭^{らん}る^も比^ひ奈^な四^し郎^{らう}が^も奴^ぬ隸^{れき}媼^{おん}内^{うち}帳^{ぢやう}内^{うち}
 多^{おほ}く^も四^し六^{りく}城^{じやう}が^も宿^{しゆく}所^{しよ}の^も背^せ門^{もん}の^も邊^{へん}を^も雪^{ゆき}中^{ちゆう}に^も瘞^{しや}置^おき^て和^わ殿^{でん}の^も刀^{たう}は^も鳥^{てう}獸^{じやう}の^も血^ちを^も
 塗^ぬり^て木^{もく}工^{こう}作^{さく}を^も殺^{ころ}せ^りの^も和^わ殿^{でん}と^も誣^しん^{こと}と^も計^{けい}較^{けう}武^ぶ田^{でん}家^けの^も眼^{がん}代^{だい}甘^{かん}利^り兵^{へい}衛^ゑ亮^{りやう}
 元^{もと}は^も訴^そぐ^も擣^こ捕^ほせ^りと^も計^{けい}す^{こと}と^も又^{また}和^わ殿^{でん}を^も欺^かき^て泥^{でい}庫^こ中^{ちゆう}に^も捕^と籠^{ろう}置^おき^て和^わ殿^{でん}
 殿^{でん}と^も密^{みつ}通^{つう}の^も罪^{ざい}あり^と誣^して^り宿^{しゆく}遣^{けん}を^も賣^うん^{こと}と^もい^ふの^もま^まで^も渠^きが^も密^{みつ}談^{だん}ふ^{こと}より^もて^も發^{はつ}
 覺^{かく}と^も有^あり^と而^{しか}も^も其^{その}時^{とき}は^も貧^{ひん}道^{だう}の^も大^{だい}山^{さん}生^{せい}の^もか^かへ^りけ^りと^も念^{ねん}成^{じやう}の^も俟^{まち}著^{ちやく}て^もけ^りの^も

既^も定^まりし^{こと}を^も三^{さん}天^{てん}士^し父^ふ代^{だい}と^も今^{いま}日^ひよ^も至^{いた}る^{こと}を^も今^{いま}茲^{ここ}大^{だい}川^{せん}生^{せい}の^{りょ}旅行^{りょ}の
 年^{とし}番^{ばん}より^も武^ぶ藏^{ざう}下^げ總^{そう}常^{じょう}陸^{りく}陸^{りく}奥^{おく}出^で利^り越^え後^ご信^{しん}濃^{のう}の^{しち}七^{しち}个^こ国^{くに}を^もう^もち^て巡^{めぐ}る^{こと}を^も
 如^{ごと}月^{げつ}の^し比^ひ首^{しゅ}途^とせ^りつ^との^も歸^{かへ}来^きる^{こと}を^もか^かき^てま^まの^も例^{れい}の^{ごと}如^{ごと}く^も食^{しょく}道^{だう}の^{きん}近^{きん}村^{むら}へ^も参^{まゐ}り^ま
 出^で発^{はつ}大^{だい}山^{さん}生^{せい}も^も登^{のぼ}り^て日^ひ暮^{くれ}され^り寺^{てら}す^へく^もむ^も蜜^{みつ}崎^{さき}生^{せい}の^{きん}隔^{へき}昨^{けつ}日^{にち}より^も郡^{ぐん}内^{うち}へ^も赴^{おもむ}き^て
 留^{とど}守^{もり}の^も無^む我^が六^{りく}と^も老^{らう}僕^{はく}と^も念^{ねん}成^{じやう}と^も沙^さ弥^やの^もを^も浩^{こう}如^{にょ}の^{しち}四^し十^{じゅう}前^{ぜん}後^ごを^も一^{いつ}箇^この^も
 武^ぶ士^し三^{さん}十^{じゅう}の^もま^まる^も女^{にょ}人^{にん}と^も一^{いつ}箇^この^も奴^ぬ隸^{れき}を^も將^{しょう}々^々當^{たう}院^{えん}に^も詣^も来^きり^て無^む我^が六^{りく}の^も中^{ちゆう}の^も無^む人^{にん}の^も
 趣^{すゑ}を^も訊^き問^{もん}す^{こと}住^{ぢゆう}持^ぢの^もか^かと^も俟^{まち}し^て無^む我^が六^{りく}の^も粒^{りゅう}銀^{ぎん}一^{いつ}顆^かを^も取^とり^て女^{にょ}人^{にん}と^も共^{とも}に^も裡^{うち}
 面^{めん}を^も入^いり^て偏^{へん}室^{しつ}を^も居^ゐる^{こと}を^も久^くく^もと^も哺^ぶ時^じは^も皆^{みな}せ^りと^も父^ふの^もま^まり^て小^{せう}の^も念^{ねん}成^{じやう}の^も
 足^{あし}痛^{いた}の^も愁^{しゆう}の^もま^まる^も寮^{りやう}の^も簞^{たん}と^も徒^た然^{ぜん}と^も堪^かへ^ず彼^か偏^{へん}室^{しつ}の^も板^{ばん}壁^{へき}を^も隔^{へき}し^て縁^{えん}頗^{ぜん}の^も曝^{はく}
 背^せを^も伏^ふせ^りと^も其^{その}件^{けん}の^も男^{なん}女^{にょ}の^も密^{みつ}談^{だん}を^も竊^{せつ}聞^{もん}し^て武^ぶ士^し八^{はち}圍^ゐ守^{しゅ}の^も家^け臣^{しん}を^も池^ち雪^{せつ}
 奈^な四^し郎^{らう}と^も呼^よぶ^{こと}の^も中^{ちゆう}で^も女^{にょ}人^{にん}の^も猿^{えん}石^{せき}の^も村^{むら}長^{ぢやう}四^し六^{りく}城^{じやう}木^{もく}工^{こう}作^{さく}後^ご妻^{さい}を^もて^も其^{その}名^なを^も夏^か引^ひ
 と^もい^ふの^もも^も奈^な四^し郎^{らう}と^も密^{みつ}通^{つう}を^も情^{じやう}由^ゆの^も定^{ぢやう}ふ^{こと}を^もれ^り加^か以^いい^ふ頃^{ころ}より^も和^わ殿^{でん}の^も
 木^{もく}工^{こう}作^{さく}許^こ遠^{えん}由^ゆの^も緯^ゐの^も趣^{すゑ}又^{また}木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も女^{にょ}兒^に濱^{はま}路^ろの^も拾^{しゆう}子^しを^も二^に三^{さん}才^{さい}の^も一^{いつ}比^ひ就^{しゆう}鳥^{てう}を^も
 必^{かならず}攫^{かく}と^もん^{こと}黒^{くろ}驪^り中^{ちゆう}山^{さん}の^もや^やる^も樹^{じゆ}枝^しは^も挟^{はさ}れ^りと^もり^て時^{とき}七^{しち}宝^{ほう}を^も掲^か箔^{はく}め^りと^も條^{じやう}龍^{りゆう}
 膽^{たん}の^も股^こ章^{ぢやう}の^も袖^{そで}長^{ぢやう}き^き袷^{あし}衣^いを^も被^かて^り下^{した}赤^{せき}緋^ひの^も衣^いを^も襲^{おそ}ふ^{こと}を^も其^{その}衣^い共^{ども}を^も今^{いま}も^も衣^い
 木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も宿^{しゆく}所^{しよ}の^も納^{なつ}戸^との^も葛^か籠^{ろう}は^も藏^{ざう}の^も中^{ちゆう}に^もあ^あり^て又^{また}木^{もく}工^{こう}作^{さく}の^も四^し日^{にち}前^{ぜん}は^も奈^な四^し
 郎^{らう}を^も撃^うつ^{こと}と^も并^{なら}に^も木^{もく}工^{こう}作^{さく}が^も亡^な殿^{でん}の^も昨^{けつ}宵^{しやう}更^{せい}蘭^{らん}る^も比^ひ奈^な四^し郎^{らう}が^も奴^ぬ隸^{れき}媼^{おん}内^{うち}帳^{ぢやう}内^{うち}
 多^{おほ}く^も四^し六^{りく}城^{じやう}が^も宿^{しゆく}所^{しよ}の^も背^せ門^{もん}の^も邊^{へん}を^も雪^{ゆき}中^{ちゆう}に^も瘞^{しや}置^おき^て和^わ殿^{でん}の^も刀^{たう}は^も鳥^{てう}獸^{じやう}の^も血^ちを^も
 塗^ぬり^て木^{もく}工^{こう}作^{さく}を^も殺^{ころ}せ^りの^も和^わ殿^{でん}と^も誣^しん^{こと}と^も計^{けい}較^{けう}武^ぶ田^{でん}家^けの^も眼^{がん}代^{だい}甘^{かん}利^り兵^{へい}衛^ゑ亮^{りやう}
 元^{もと}は^も訴^そぐ^も擣^こ捕^ほせ^りと^も計^{けい}す^{こと}と^も又^{また}和^わ殿^{でん}を^も欺^かき^て泥^{でい}庫^こ中^{ちゆう}に^も捕^と籠^{ろう}置^おき^て和^わ殿^{でん}
 殿^{でん}と^も密^{みつ}通^{つう}の^も罪^{ざい}あり^と誣^して^り宿^{しゆく}遣^{けん}を^も賣^うん^{こと}と^もい^ふの^もま^まで^も渠^きが^も密^{みつ}談^{だん}ふ^{こと}より^もて^も發^{はつ}
 覺^{かく}と^も有^あり^と而^{しか}も^も其^{その}時^{とき}は^も貧^{ひん}道^{だう}の^も大^{だい}山^{さん}生^{せい}の^もか^かへ^りけ^りと^も念^{ねん}成^{じやう}の^も俟^{まち}著^{ちやく}て^もけ^りの^も



妙真の持信と起行と親兵衛が存じと索極め五力士の往方とも索企と願ひおせり。
吾君これを許しぬ老人婦人の長旅の寒暑を就て危かるべしと老を養へと可
寧め仰られりぬ某の親兵衛を將と再龍田を首途と関の八州を巡る程その
次の年の夏の比文五兵衛二月十五日ぬぬ安房に在りて妙真の小廝依ぬ
煙の水滲るいぬのと妻と大江屋の名迹とあるその日ぬぬ安房に在りて妙真の
余后のるをあると信乃いぬと駭嘆と里見の殿の洪恩と感と奉り且親兵衛が
存亡の定まぬとち歎き文五兵衛が死をいと惜みて又いぬ今この圓居ぬ莊々と
對面を這ぬぬぬの処を宿とて往方定ぬぬぬぬ面會は異ぬぬと欽くぬと
いふ照文領きと又この外にも歡一た一條のいぬぬ被濱路のぬぬぬひける畢
竟照文又濱路かへ就て甚麼るるを説出せるぬ次の巻ぬ解分ると聴か

里見八犬傳第七輯卷之五 終

